

小林昇文書について

荒 恵子，服部 正治

立教大学図書館は、故小林昇立教大学名誉教授（1916～2010年。以下、小林と記す）の蔵書約9,300件を小林昇文庫として収納し、このほどその整理を終了した。そこには、イギリス重商主義、アダム・スミス、フリードリッヒ・リスト、さらにはジェイムズ・ステュアートを主要な柱とする小林の研究分野に関連する貴重な書物が数多く含まれている。図書館の整理基準では、貴重書93件、準貴重書1件である。現在、立教大学経済学研究会は『小林昇文庫目録』を作成中である。また、小林の著作目録は、服部によって『小林昇著作目録』（2010年10月）として作成され、さらに服部正治・竹本洋編『回想 小林昇』（日本経済評論社、2011年12月）の「小林昇著作・短文目録」では『小林昇著作目録』では収録されなかった様々の短文約50点が追加されている。小林の研究自体は、『小林昇経済学史著作集』全11巻（未来社、1976～79年、1988・89年）をはじめとする小林の著作全体を通して評価されることになることは言うまでもない。『立教経済学研究』第65巻2号（2011年10月）は、「小林昇経済学史をいかに受け継ぐのか」という特集を組んでその評価を試みているし、『回想 小林昇』にもそれは示されている。

服部は『回想 小林昇』で「戦後日本の経済学史という学問領域の確立に大きな寄与をなした小林先生の研究の軌跡自身が、戦後日本の経済思想の展開過程を研究する者にとっては、今後、研究対象となることは確実であ

る」¹⁾と書いた。これは、小林の研究をも含む小林昇論というべき研究が今後行われることを意識してのことであった。ここに紹介する「小林昇文書」は、小林のご遺族から立教大学経済学部へ寄贈された種々の遺品全体を示している。「小林昇文書」の整理は、2013年4月より立教大学経済研究所の研究プロジェクトの一つとして行われている。本稿はその整理作業の中間報告である。なお本稿は、以下の文書中の、の紹介が中心となったが、今後は、の紹介を予定している。

* * *

小林昇文書の内容

I. 日記²⁾ (写真1)

- ・1932（昭和7）年6月13日～8月31日 ‘My Record of Impression’、下段に“Random Thoughts”と改題した、と記入してある。日記、短歌、読后感想文など15歳の思いがつづられている。
- ・1932（昭和7）年9月2日～1933（昭和8）年1月15日 ‘Random Thoughts 2’
- ・1933（昭和8）年1月16日～8月24日 ‘Random Thoughts 3’
- ・1933（昭和8）年9月5日～10月6日、

1) 服部「『回想 小林昇』編集にあたって」、『回想 小林昇』前掲、iv ページ。

2) 以下の日付はノートの記述に従った。



写真1

1934 (昭和9)年1月2日～8月28日 'Random Thoughts 4'

- ・1937年1月8日～12月31日 (20歳) 昭和12年日記
- ・1938年1月1日～12月31日 昭和13年日記
1938年7月17日～8月21日。ヘーゲル哲学についての所感を含む。
- ・1939年1月1日～12月31日 昭和14年日記
- ・1940年1月1日～12月31日 昭和15年日記
- ・1941年1月1日～12月31日 昭和16年日記
- ・1942年1月1日～12月28日 昭和17年日記
- ・1943年1月～12月31日 昭和18年日記
- ・1944年1月1日～7月16日 昭和19年日記
最後の日記に、「List, Die Ackerverfassung, die Zwergwirtschaft und die Auswanderung を三読す今回は最も精読せり」とある。
- ・1946年7月15日～1947年4月27日 昭和21・22年日記
- ・1947年4月28日～11月24日 昭和22年日記
- ・1948年2月24日～1951年3月20日 昭和23～26年日記
- ・1972年11月～1974年12月 経済学史学会記録。この期間小林は経済学史学会代表幹事を務めた。

- II. 「覚書」(15.5×12.5cm) (写真2)
「覚書」(17.0×11.0cm) はヴェトナム

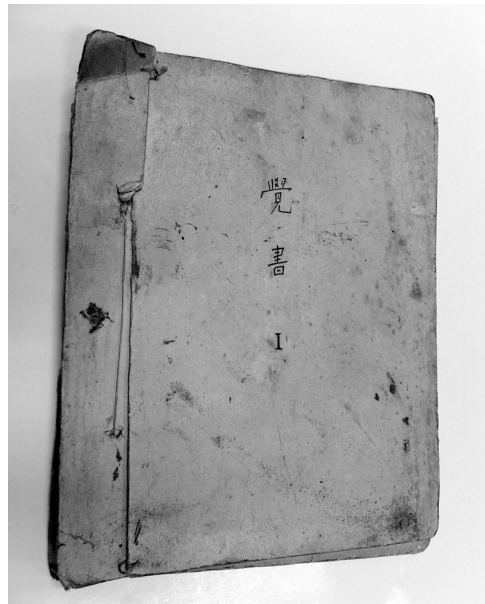


写真2

ムでの戦地ラムカイの日記, 短歌, 「覚書」に記した構想について書いてある

「名簿」(10.6×8.0cm)。1944年8月3日～1946年4月3日。信州の手書き地図1ページ, 「八月三日応召...入隊」から「四月三日ハイフォン発」までの移動記録5ページ, 短歌を含む。

戦地で携帯し続けた「自己製の小さいノ

ート」³⁾で、和紙やノートの紙を糸でとじてある。鉛筆書き。

III. 1964年3月23日～12月27日、「ドイツ日記」手帳(10.25×10.0cm)にドイツ出張中の記録を付けている。

IV. 戦前講義ノート7冊

- ・1940年「昭和15年度 経済学史講義ノート」(20ページ)
- ・1941年「経済学史 昭和16年4月-9月」(23ページ)
- ・「東亜経済事情 昭和16年4月-9月」(23ページ)
- ・「農業政策 昭和16年4月-9月」(23ページ)
- ・「植民政策, 東亜経済事情 昭和16年4月-9月」(18ページ)
- ・1942年「経済政策(1) 昭和17年度第1学期」(13ページ)
- ・「経済政策(2) 昭和17年度第2学期」(45ページ)

V. ノート

- a) 1932年4月23日～8月27日、「和辻哲郎氏の『日本精神史研究』」の抜書きと感想を書いたもの、37ページ。
- b) 1932年6月13日～1936年3月 短歌の清書ノート⁴⁾。「大和路の白くつゞきて盡くるあたり山際にして古塔立つ見ゆ 法隆寺」で始まる。
- c) 1932年9月2日～, 短歌, 旅行記, 楓と

押し花がはさんである。短歌には父の病と死、その1年後の兄の死などに寄せたものがある。

- d) 1936～1939年 「朝明の灰」⁵⁾は短歌の清書ノート。これを改題し発展させた「朝降る灰」の原稿用紙の稿と活字原稿とがある。
- e) 1934年10月3日～12日「車窓の北海道 - 習作歌帖 第二」, 「大沼 - 札幌 - 狩勝 - 當別温泉 - 阿寒湖 - 大雪山層雲峡 - 旭川 - 洞爺湖」の旅を「昭和十年元旦, しるし終る」, 「短歌一百九首 長歌一首」。楓がはさんである。
- f) 「長編『遠征以前』の覚書」を1941年4月5日より大学ノートに執筆。
- g) 「川べり, 墓地の櫻(覚書)」, 大学ノート。「川べり」は1942年6月18日～7月19日に執筆。「墓地の櫻」は1946年4月13日浦賀上陸に始まり, 帰還兵の心情がつづられている。「覚書」の一部が転記されている。
- h) 「春の鶉, 杜鵑」, 大学ノート。「春の鶉」は増田晃の戦死を聞いた直後1943年8月に

5) これは、日記帳(写真1)に清書した歌稿。日記帳の背表紙には「朝明の灰」とラベルが付いている。原稿用紙には初期歌稿と書かれ、稿の題を「歌集 朝明の灰」, 「草の花」, 「木の実のごとし」, 「朝降る灰」へと変更している。「朝降る灰」最後の歌は、「暁の門にかがみてみる母にすでにちかづく覺りたまはぬに」(7月29日召集)。「朝降る灰」は未刊行であったが『歴世 小林昇全歌集』(不識書院, 2006年)に一部収録された。

また、「草の花 一学生の歌」50首は「第二回五十首募集短歌」の入選作品。応募263篇(50首で1篇)中入選11篇と、選者の講評が掲載されている(『短歌研究』6巻7号, 1937年7月, 15-20ページ)。選者の一人北原白秋は、83点で三位、「最も未來性を豫約される新味が私を喜ばした……」と評している(同, 205-212ページ)。小林は、この20歳の思い出を70年後の『歴世』(前掲, 488ページ)でも振り返っている。

3) 小林「暦数」, 『数学セミナー』8巻4号, 1979年4月, 90ページ。帰還後、「まもなく本格的にリスト研究を再出発させ……リストの著作集や手の届くかぎりでの研究・関連文献を、戦地で考えていた計画に従って読みつけた」(小林『山までの街』八朔社, 2002年, 111ページ)。

4) 武蔵高等学校『校友会誌』22号(1933年6月)に掲載された短歌「大和」の第一首。「父の死」(1934年2月)、「兄を哭す」, 「兄を埋む」(1935年5月, 6月)、「二・二・六事件を」(1936年3月)などを含む, 134ページ。

執筆されている。「『狼煙』の發議者」の一人、『白鳥』の著者、増田晃5月4日戦死を遂げたと始まり、増田の追悼号『狼煙』13号に掲載された。「杜鵑」は1944年6月22日～6月25日に執筆され、仙台の一日が書かれている。

VI. 研究ノート

- ・‘Materials on Sir James Steuart’, A4版大学ノート
- ・‘Sir James Steuart and Mercantilism’, A4版大学ノート
- ・‘国富論第五編, Steuart, BK. . . Mercantilism 批判」(下線部は赤ペン), B5版大学ノート
- ・‘INDUSTRY’, A4版大学ノート
- ・‘LIST - ARCHIV’, Tübingen Universität’, A4版大学ノート, 1964年リスト文庫に通った日記を含む。
- ・‘LIST - ARCHIV’, A4版大学ノート, 日記7月3日～23日を含む。
- ・‘Tübingen Universität’, Stadtarchiv Reutlingen, Stadtarchiv Kempten’, A4版大学ノート
- ・‘歴史学派’, 大学ノート
- ・‘『東西リスト論争』補遺(控)’, 大学ノート

VII. 鷗外ノート9冊

- ・‘鷗外文献’
- ・‘鷗外」年譜
- ・原稿

VIII. Scrapbook A4版5冊。執筆した雑誌記事と主に小林に関する新聞の切り抜き⁶⁾。

IX. 1964年5月8日, 6月6日の Reutlingen の地元紙。日本からのリスト研究者の来訪を伝える記事が写真とともに掲載されている。また同地元紙1989年5月13日の, ‘200

Jahre Friedrich List’ を伝える記事もある。他に4月28日, 5月5日, 5月11日付(複写)。

- X. 原稿⁷⁾
- XI. 校正刷(ゲラ)⁸⁾
- XII. 小林昇自身の論文の抜刷
- XIII. 国際会議資料など。Colloque James Steuart 1995, Grenoble の報告原稿を含む。
- XIV. 講演録音テープ
 - ・小林ノ杉山 対談, 1月16日
 - ・『小林昇経済学史著作集』完結記念の集いノ杉山忠平・住谷一彦進行役。1980年3月8日
 - ・共通論題『小林昇経済学史著作集』をめくって2, 経済学史学会関西部会大会, 於: 同志社大学, 1980年5月31日
 - ・小林昇教授講演会「経済の学問と常識 経済学成立の事情」秋田短期大学学術講演会, 1987年10月13日
- XV. 講演速記録
 - 立教大学大学院住谷ゼミ『近代知識人のプロフィール VII』「わたしの学問形成」⁹⁾ノ小林昇述, 於: 立教大学, 1994年11月11日, 活字コピー
- XVI. コピー資料, メモ類, 鷗外の遺書(和紙複写)などを含む。
- XVII. 蔵書の一部, 辞書, 地図
- XVIII. 雑誌
- XIX. 抜刷
- XX. 書簡ファイル, 書簡, 葉書。ガラス

7) 歌稿「カレドニア初夏」を含む。これは表紙付の自家製冊子だが未刊行であった。『歴世』(前掲)に一部収録された。

8) 「フリードリッヒ・リストと重商主義——リストの生産力論の学史的位罫と類型とに関する一試論」(校正3稿で出版を止めた校正刷)を含む。

9) 住谷一彦・和田強編『歴史への視線——大塚史学とその時代』(日本経済評論社, 1998年)に収録, 小林『経済学史春秋』(未来社, 2001年)に再録。

6) 立教大学に移るにあたって、福島大学に留任するよう要請した学生集会が開かれたこと、本人の辞職の「意思が固いため」、断念し壮行会へと転換したことを伝える記事もある。

ゴウ大学のアンドルー・スキナーなどの書簡ファイルを含む。

XXI. 図書カードボックス3箱

XXII. 名簿

XXIII. アルバム

XXIV. 賞状、学位記、辞令、記念品など

XXV. こけしの評価に関する裁判記録, 1975～1979年。(複写。原本は「原郷のこけし群 西田記念館」所蔵)

XXVI. その他。‘Reutlingen-Stadtbummel mit Friedrich List’ VHS, ドイツ語会話学習用テープ, 額類など

* * *

以上の紹介からわかるように「小林昇文書」には、晩年に『歴世 小林昇全歌集』を編み、「森鷗外研究の新課題 鷗外文学と脚気対策問題」(『日本學士院紀要』58巻2号, 2003年)を書いた小林の、若き時代からの文学に寄せる思いが伝わる資料も多く含まれている。また戦地ヴェトナムで記された、今後の研究計画についての覚書など、小林の戦後経済学史研究の原点とも言える資料も存在する。

『回想 小林昇』で佐藤清は、「先生の願いは、福島大学のキャンパス内にある、戦没した教え子たちの慰霊碑に再び詣でることと先生のご努力によって成った『原郷のこけし群 西田記念館』を訪れることであった」¹⁰⁾と書いている。1940年に福島高等商業学校講師として赴任し、1955年まで福島大学教授であった小林が最後に福島を訪れたのは2006年6月であった。慰霊碑建立を伝える大学同窓会誌には、戦没同窓生刻名記念碑の254人の名前、戦没日、地名が掲載され、遺族の便りが紹介されている¹¹⁾。

小林は、「戦中の世代は狂気か無気力(無抵抗)かのふしぎな国民」と戦後世代には見

えるであろうし、「日本の過去の戦争責任を...戦後生まれの世代として、引き受けるといふことにも、なっとくがいかないはずである。それはもっともである」と言う¹²⁾。下級兵士は戦場では軍幹部から棄民にされ¹³⁾、小林が帰還した時すでに世間は帰還兵に冷ややかであった。小林は以下のように記している。「敗戦のあとの市民の目は帰還兵にはむしろ冷たく、なぜか兵隊にも戦争の責任があると思われるような気のすることがときどきあった。これは戦争そのものの否定という観点が屈折して現れたものだったのかもしれない。また、戦没者の家族からすれば、ふだん見知っていた者が五体健全な姿の帰還者としてもとの生活に戻っているのに逢うのは、いかにもつらかったことであろう」¹⁴⁾。

いのち惜しむ敗兵として洪水の国なか行きし胸潰かりつつ

わが頬を靴もて打ちし子どもに打たしめし者らなほ生きのこる¹⁵⁾

12) 小林「一人の戦争体験」、『わだつみのこえ 日本戦没学生記念会機関誌 特集 戦争の記憶から武力なき平和へ』108号, 1998年12月, 2ページ。

13) 竹本洋は、小林『帰還兵の散歩』(未来社, 1984年, 52-53ページ)の「もしヴェトナムにアメリカ軍が上陸すれば、総軍はマニラでたように、また将校たちだけが兵隊を捨ててどこへか逃避し、事務用員として小銃しか持たされていない総軍所属の兵隊には、四散して死ぬ以外の途がないであろう」という一文を引用して、「兵は国家の棄民となりうるという観念は、兵は戦闘指導者によって戦場へ遺棄されるという確信によってさらに現実的なものとなった」と述べている(竹本「小林昇の戦争体験と戦後非啓蒙のひとつの基点」, 関西学院大学『経済学論究』, 2008年9月, 34ページ。また, 17-18ページ参照)。

14) 小林『山までの街』前掲, 110ページ。

15) 小林『歴世』前掲, 485, 366ページ。

10) 佐藤清「補充兵と経済学」, 『回想 小林昇』前掲, 269ページ。

11) 『信陵 創立60周年記念事業特集』43号, 1986年8月。

「両頬に三百ものピンタをしまい込んでいるのだからもういいのではないか」という気持ちがあることを表白しつつも、「自分がひたすら被害者だっただけでなく、しいられてではあったが加害者だったという意識も、やはりぬぐうことができない」¹⁶⁾、と小林は記した。ヴェトナムでの一兵士としての体験

は、そのまま戦後の研究の基盤をなし、息の詰まるような執念で小林は自ら定めた研究の荒野を一人開墾した。「地味な労作であろうところがけたものばかりである。私にはそういう研究態度しかとれなかったということだけのことだ」¹⁷⁾。戦地で「覚書」に刻んだ、生還できた時の研究計画を、一刻の時間も惜しんで遂行した小林はこう語った。

16) 小林「二十代のモチーフ 教養主義と諦念」,
『日本読書新聞』1478号, 1968年10月14日。

17) 同上。